

木 邊 成 麿

小惑星の名前

ふるさとの夜空に今夜もたくさんの星が輝いています。青白い光を放つ星や赤く燃える星もあれば、わたしたちの目では見えない星もたくさんあります。地球も太陽の周りをまわる惑星と呼ばれる星の一つなのです。

果てしなく広がる宇宙には、いったいどれほど数多くの星が浮かんでいるのでしょうか。実は人類は、まだ星の世界のほんの一部しか知らないのです。

1992年（平成4年）、新しい星が発見されました。地球から約1億2千万キロメートル離れたところ、火星と木星との間で、直径10キロメートルほどの小惑星が確認されたのです。

この新しく発見された星は、優れた天体望遠鏡づくりによって天文学の進歩に大きな役割を果たした偉人の名前にちなんで、kibeshigemaro（キベシゲマロ）と名づけられました。

星を仰いで

木邊成麿（本名・木邊宣慈）は、1912年（明治45年）4月1日、今の野洲市木部に生まれました。成麿の家は、八百年の歴史をもつ真宗木辺派本山錦織寺でした。

伝統を受け継ぐ家に生まれた成麿は、物心がつくと親元から離れて厳しく育てられました。11歳になってふるさとにもどった成麿は、僧侶になる儀式を受け、師匠から仏教を学ぶことになりました。

大変学識豊かな師匠は、仏教だけではなく、さまざまな世界のことを成麿に教えました。成麿は師匠のそばで懸命に学び続けました。

師匠は夜空を指しながら、星の世界についても成麿に教えました。心豊かな成麿は、毎晩のように輝く星を仰ぎながら、尊い仏の教えをしっかりと胸に刻みつけました。

土星のリング

成麿は膳所中学校（今の膳所高等学校）に進学すると、星の世界を研究する

天文学に強い関心を寄せるようになりました。

成麿はいつも朝早くから家を出て中学校へ通いましたが、11月も半ば^{なか}を過ぎると、東の空に太陽よりも早くさそり座がのぼってきました。成麿は赤く燃えるアンタレスや夜明け前の土星の輝きに照らされながら野洲駅へ向かいました。

連日二つの星をながめていた成麿は、アンタレスが明るさを少しずつ変える変光星^{へんこうせい}であることに気づきました。星の世界の不思議さをかいま見た成麿は、どうしても天体望遠鏡で星を観測したいと思いました。

そのころは、今のように天体望遠鏡がすぐには買えるわけではありませんでした。そこで成麿は、母に頼^{たの}んで材料を買い求め、作り方の本を読みながら、冬休みや春休みの時間を使って天体望遠鏡を自分で作ることにしました。

しかし、中学生にとって簡単なことではありませんでした。特に、天体望遠鏡で最も大切なミラー作りがうまくできなかつたのです。時間をかけてガラス材を磨^{みが}き、計算どおりのミラーを作ろうとしても、最後には割れてしまったり、星の光をはっきりと集めることができなかつたりしました。

失敗しても成麿は決してあきらめませんでした。天体望遠鏡を作り始めてから半年後の1927年（昭和2年）6月、15歳のとき、京都大学花山天文台の中村技官^{ぎかん}の指導を受けた成麿は、とうとう念願^{ねんがん}の天体望遠鏡を手に入れました。

さっそく成麿は、苦心して作った天体望遠鏡を夜空に向けました。そのとき成麿の目に映^{うつ}ったのは、土星の見事なリングでした。初めての自作天体望遠鏡で星の神秘的なまでの美しさにふれた成麿は、そのときの感動を生涯忘れることはありませんでした。

花山天文台で

1928年（昭和3年）、中学校を卒業すると、成麿は仏教を本格的に学ぶことになりました。錦織寺の歴史と伝統を守るための勉学に励む中で、成麿は時間を見つけては、中村技官に指導を受けて天体望遠鏡を作りました。

ところが、1932年（昭和7年）9月、成麿が20歳のとき、中村技官が急に亡くなってしまったのです。

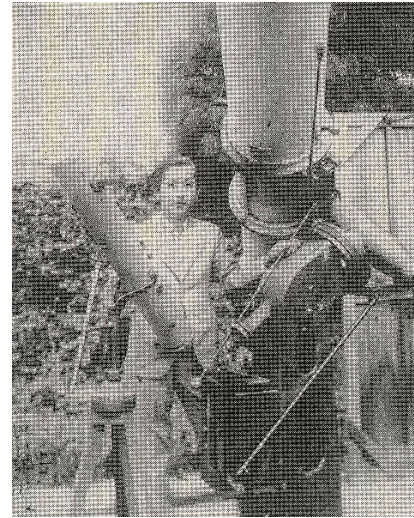
成麿は仏教を学び伝える立場でしたが、京都大学花山天文台の願いを受けて、中村技官の後を受け継ぐことになりました。

天文台で仕事をするようになった成麿は、天体望遠鏡作りの技術を磨きました。

数年後には、そのころの国産では最も大きい口径^{こうけい} 31 センチメートルの反射望遠鏡を作るほどでした。

また、1936 年（昭和 11 年）には、皆既日食^{かいきにっしょく}の観測のために北海道へ出向き、天文台の中心になって、観測用の道具や天体望遠鏡を作りました。

この年、『反射望遠鏡の作り方』という本を書いた成麿は、若いながらもすでに天体望遠鏡作りの優秀な技術者になっていました。中村技官でさえもできなかった口径 60 センチメートルもある最大級の反射望遠鏡を作るという夢のような計画が成麿に聞こえてきました。



成麿と反射望遠鏡

戦争の前後

1937 年（昭和 12 年）7 月、日本は中国と戦争を始めました。その後、約 8 年間、日本は世界の国々を相手に戦争状態におちいりました。世の中は一変し、天文学どころではなくなっていました。最大級の反射望遠鏡を作る計画もいつのまにか消えてしまいました。

天文台での仕事をやめた成麿は、1938 年（昭和 13 年）4 月からの 4 年間、京都大学の学生として、すべての学問や研究のかなめである哲学^{てつがく}を学びました。1943 年（昭和 18 年）からは、平和が早くもどってくるのを祈り^{いの}ながらも、陸軍の研究所で仕事をするように命じられました。

1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日、成麿が 33 歳のとき、さまざまな都市や工場を焼きつくし、多数のかけがえのない命をうばった戦争がやっと終わりました。

しかし、成麿の身体^{からだ}は、戦争中にわずらった病気にひどくむしばまれていました。大変な手術を受けて奇跡^{きせき}的に元気になったときには、戦後から 3 年目を迎えていました。

重い病気から生還^{せいかん}した成麿は、天体望遠鏡作りの技術を世の中に残し、多くの人たちに伝えるため、1949 年（昭和 24 年）、『反射望遠鏡の作り方』を 13 年ぶりに書き改^{あらた}めて出版しました。

世界の天文台へ

戦後から4年目、日本の社会はようやく落ちつきを取り戻し始めていました。成麿の新しい本が世に出て間もなくすると、天体望遠鏡作りの仕事が成麿に寄せられるようになりました。

戦争の前後、いったんは天体望遠鏡作りをあきらめかけていた成麿でしたが、天体望遠鏡作りを頼まれると、時間を惜しんで仕事に打ち込みました。

その後、日本はめざましい勢いで新しい平和な社会を築き出しました。社会の発展にあわせるかのように、成麿は次々と大型の望遠鏡づくりに取り組みました。

1954年（昭和29年）に、口径40センチメートルの反射望遠鏡づくりにたずさわると、1957年（昭和32年）には、花山天文台のために口径六十センチメートルの反射望遠鏡を作りました。戦前からの夢のような計画を成麿はついに成し遂げたのです。

この年の10月、世界初の人工衛星スプートニクが地球のまわりを飛ぶようになると、外国の天文台からも天体望遠鏡作りの仕事が成麿に寄せられるようになりました。

成麿の作った天体望遠鏡が外国の天文台で活躍し始めると、成麿の技術の高さに世界の天文学者おどろき、感心しました。成麿は世界中の天文台の期待にこたえるように、ますますその技術を磨きました。

1967年（昭和42年）、成麿は天体望遠鏡作りの新しい技術を世に伝えるため、これまでの『反射望遠鏡の作り方』を全面的に書き改めて出版しました。



真理を求めて

天体望遠鏡は大きく分けると、屈折型と反射型があります。どちらもガラス材を磨いて作ったミラーが必要です。しかし、このミラーが少しでもゆがんでいたり、表面に傷がついていたりすると、星の世界をはっきりと映すことができないのです。成麿の技術の高さは、他のだれもまねができないほど見事なミラーを作ることでした。

1 万分の 1 ミリメートルほどのゆがみや傷さえも残さないミラー作りは、とても大変な仕事でした。成麿は温度によってガラス材が伸び縮みするのをさけるため、冬は暖房のないところで、夏は日が落ちてから夜通しでガラス材を磨きました。また、少しでも磨きすぎると、計算どおりのパラボラ（放物線）をそなえたミラーができないため、初めからやり直さなければなりませんでした。

成麿は生涯で約 2 千面ものミラーを作りました。どんなに難しいミラー作りでも、初めて自作望遠鏡をのぞいたときの感動を胸に、成麿は心をこめてガラス材を磨きました。

1970 年（昭和 45 年）、58 歳のとき、天文学の進歩に大きな役割を果たした成麿に、第 4 回吉川英治賞社会賞がおくられました。成麿の努力と技術に多くの人々が拍手をおくったのです。

その後、滋賀県教育委員会委員長や滋賀大学の先生をつとめた成麿は、65 歳のとき、約 50 年にもわたる天体望遠鏡作りを次の技術者にゆずりました。成麿は歴史と伝統を誇る錦織寺の門主として、仏教を守り伝え、人の正しい生き方を説くつとめにもっぱら励みました。

1990 年（平成 2 年）、星の世界と人の世界の真理を求め続けようとした成麿は、78 歳の生涯を閉じました。成麿の名前がつけられた星は、今日も空高くからふるさつを見守っているのです。